

たらしい地獄の様相であり、恐ろしい場面に何回も出会った。亡き戦友たちのご冥福を衷心より祈り上げます。

思い出の土地富錦

京都府 武内 吉男

富錦という美しい地名は我々にとって一生忘れることの出来ない思い出の土地富錦である。そうして、そこには我々部隊の数多くの戦友たちの英霊が永眠している場所である。

昭和二十年八月九日、突如として国境を突破したソ連軍は空陸江一体となって、我等の数十倍の兵力をもって一挙に富錦陣地を壊滅せんと攻撃を加えてきたのであるが、三日間陣地を死守して頑強に抵抗を続け、使命達成に死力をつくしたのである。一たん師団の転進命令を受けるや夜暗に乗じて敵の包囲を突破するため、敵前斬込を敢行し、九死に一生を得て五か山陣地に集結してその

翌日より、ひたすら部隊主力と合流すべく、道なき湿地を渡り、また食なき山林を彷徨し、満人の襲撃を受けながら日夜を問わず終戦の事実も知らず、これという食もなしに数百キロ、一か月余り難行苦行を重ね、牡丹江目の前の石頭河子というところで終戦を知り、涙をのんで武装解除を受け、牡丹江郊外の海林の収容所に入り、帰国の順番を待つことになった。

収容所に入り驚いたことに、一装用軍服を着た無傷の軍隊がいっぱいあふれていたことである。我々はボロボロの夏服を着て、一か月の転進を続け、敗残兵のようになつた部隊が到着しても何一つ支給されない、本当に困つたものだ。しばらくして、前を見ると、これもボロボロの服を着た四中隊の片山隊長を見つけ、お互いの無事を喜びあつた。我々も片山隊に合流してもらい一安心した。

満州の十月は寒く、夜になると寒さでゆっくり眠ることもできず、我々に比べて冬服を着ている部隊との差を思うと、腹が立って仕方がない毎日である。十月もそろそろ終わりころ、我々中隊にも帰国の順番が来て、千人

の編成で一個大隊として、海林駅から赤い貨車に乗せられ、汽車が動き出したときからソ連に、今思えばだまされた第一回目だった。汽車はハルビンに向かっていった。

鉄橋を日本兵が爆破して通れないので、それが復旧するまで待つということ、小学校へ入れられ、それから毎日南満州から送ってくる物資をソ連の赤い貨車に積みかえ作業ばかりの日が続いた。

ようやく十一月終わりのころ、ウラジオストックから東京ダモイということで、一両の貨車に四十人詰め込まれ、狭くてとても寝ることもできないありさまで、何日かかったかはっきり知らないが、全員下車ということで、外へ出て見てびっくりした。ウラジオどころかシベリアのチタの町だった。駅前の広場人員の受け渡しでなかなか人員点呼ができず、寒い中ふるえながら長時間待たされた。ようやく我々四中隊はトラックで二時間ばかりかかり、アタマノフカというところの収容所へ入れられた。

いよいよ長く苦勞の抑留生活の始まりである。零下三十度の寒さの中、毛布一枚の支給もなく、夜の食事は百

グラムの黒パン一個、一キロの黒パンを十人で分けるのに一苦勞。これが大きいや、これの方が小さいとなかなか食べるころへいかない。そのうちだれかがクジ引きをしるということで、どうやら食えることができた。食事も朝は燕麦のおかゆとスープ、昼は黒パン、夜もおかゆとスープでは、とても仕事どころではなかった。毎日れんがを貨車から自動車積み込み作業で、寒さと空腹で腰足もフラフラだった。寒さの中、栄養失調で多くの友が倒れていったことを思えば涙が出る。

ようやく春を迎え、我々中隊は建築中隊として、少し離れたダランスというところで建築作業をやることになり、大工、左官、電気工、配管工、その他土工作业があった。電気工とか配管工等とノルマも上がるけれども、我ら土方はなかなかノルマができず、毎日々々ノルマノルマで追い回された。

短い夏も終わるころ、若い元氣者ばかり五十人で、一番心配していた森林、伐採班として山へ行く車に乗った。今年も帰国の夢もなくなった。出るのはため息ばかり、監視兵四人とともにトラック三台に分乗して、目的

に向かう山林に着くと、早速二重の幕舎立てをする者、便所を掘る者、燃料のまきを集める者、炊事場をつくる者、なかなか大変だった。ようやく夕方大体片づいた。明日一日は休みということで、みんなの顔が笑っていたことを思い出す。伐採作業のノルマは一日三人一組で八立米切ることだった。なれない仕事で心配していたが、若い人ばかりだったので、どうにかやっていくことができた。零下三十度、四十度となると、トラックがこなく、まる二日食糧が届かなかったこともあり、お茶ばかりで過ごしたこともあった。

腹が減ったときの話といえば、みんな正月のもちの話、祭りのすしの話で持ち切りで、何を見ても食物に見えた。

ようやく春となり、どうにかみんな元気でチタの中隊と合流した。チタのラーゲルは民生運動が盛んで、講習会も行われていた。自分は日和見主義者としてグループからにらまれていたようでした。幸い自分は配管の方で夕方おそく帰るので、グループの者と顔を合わすことも少なく、無事にすみました。

思いもよらず、十一月急にダモイのときが来てチタを出発、十一月十五日ナホトカ着。思ったより早く山澄丸に乗船、ただ帰れる感激に酔い続けた。後になりましたが、満州、シベリアで亡くなった多くの戦友のご冥福を祈念してやみません。

追憶の記

島根県 池尻 哲

終戦

昭和十三年九月、十六歳だった私は一念発起、満蒙開拓義勇軍に身を投じ開拓団生活五年、昭和十八年暮れハイラル満州第四九〇部隊、通称第八国境守備隊に入隊する。ハイラルの高台に陣地構築しつつ、ソ連の侵略に対してひたすら日夜の猛訓練を重ねていた。

そんな日が続くある日、地平線はるかに敵戦車群を発見した。敵は刻々と我が陣地に迫って来る。ソ連の戦車は世界に冠たるもので、前面の装甲板の厚さも七十センチ